

## 湘南の由来とエリアを探る

### その2

#### 湘南の由來說はひとつ？

文責：和田精二

2017,03,15

#### 2-1 「相南」の使用例が見つからない

「湘南」の由来には2つの説があります。ひとつは相模国の南を指す「相南」が変化して「湘南」となったとする説（とりあえず「相南」説としておきます）、もうひとつは中国の景勝地「湘南」に起因するという説です。後者については、中国の景勝地「湘南」を愛でる禅僧等によって日本に持ち込まれたであろうことを前回説明しました。



図1 高瀬慎吾翁顕彰碑（平塚市中央図書館前）

さて、「相南」説ですが、おかしなことに気がきました。ネットで何度検索しても「相南」に関する情報が出てこない、唯一出てくるのが、相模原市南区相南という町名のみ。仮に、南区相南（1～4丁目）と「相南」説がどこかでつながって来るとしても、それ以外に関連情報が見つからないのが気になります。そういえば、湘南の由来を紹介する場合、「相南」説についてはそういう説があると言うだけで、踏み込んだ説明が一切ありません。まるで「相南」説は「湘南」説を説明する場合の枕詞のようです。そうすると、何としても「相南」説について詳細に記述した文章を探し出したいところです。

そこで今回は、文献を探すために湘南エリアの図書館巡りに精を出しました。「相南」説を探すことは中国に起因する「湘南」説を探すことと同義ですから、由來說全般についての調査をす

ることになり、結果として湘南の由来についての全容が見えてきたのが収穫でした。

#### 2-2 「相南」説はなかった？

「相南」説について説明した事例が見つからなかった代わりに、「相南」説に疑問を呈する論が見つかりましたので一部を引用してみます。（「湘南の逆襲」みつはし貴義 神奈川新聞社）

『湘南の名勝についてはどうであろうか。相模国の南部を縮めて「相南」とする。そして、風光明媚な中国湘江の「湘」を拝借し、「相」と「湘」を入れかえて「湘南」とするという説明がある。しかし、この「相南」という言葉そのものが言葉として定着した様子がどこにもみられない。相模国は長い歴史を持っているのだから「相南」ということばがもしあったとしたら「相南」も古くから人々が使っていたはずである。それがそうでないのである。だとすれば、「相南」ということばは架空のものであるかも知れない。理屈としては存在するが実際には使われたことが無かったのかも知れない。とすれば、「相南」とは何か。それは湘南を導くための単なる道具、理由づけにすぎなかったのだと考えることはできないだろうか。【省略】私には「相模国南部→相南→（湘江）→湘南」というこのとりすました図式が、なぜか最初から「出来過ぎている」感じがしてならなかった。』

やはり、「相南」の具体的な使用例がないことに言及した文献が存在していました。そうすると、湘南の由来に2つの説あり、とする通説(?)を疑ってみる必要が出てきました。そこで推定されるのが、もともと、相模国の南を「相南」と称する地名は存在しなかったか、存在したけれどもいつの間にか消滅してしまった、という2つの可能性です。そこで後者についてヒントを与えてくれるのが、高瀬慎吾氏の説です。（「湘南の文学めぐり」湘南紀行文学会編）彼は「相南」という地名の存在自体について言及していませんが、その可能性を示唆する文章を残しています。それは、「湘」が雅称（風雅な呼び方）として地名に大きな影響を与え、「相」を駆逐していったのではないかとする考え方です。

#### 2-3 「湘」という文字がもつブランド力

高瀬氏の雅称にかかわる文章を引用（一部省略）してみます。『湘南平、湘南電車、湘南高校など、「湘南」という熟語がしばしば用いられている。その指すところは、神奈川県臨海地帯となっている。湘南に対して、「湘北」という語も用いられている。これは、神奈川県の北域、津久井郡方面を言っている。

また、厚木市附近では、「湘央」または「相央」の文字をよく使用している。「湘」は「相」の転化というよりも、雅称といったほうが適当だろう。したがって、湘南を語るためには、まず、相模のことから始めなければならない。現在、相模という語は、相模川、相模湾、相模灘などのほか、あまり用いない。しかし、江戸時代までは、この地の国名として盛んに用いられた。【省略】「サガミ」という呼称にならびとかが相(シャウ・サウ)、模(ポ・モ)の字をあてたので、やがてこれが「相州」となり、「相陽」となり、あるいは「相中紀行」などと広く用いられるようになり、ついでに「湘陽」「湘南」と飛躍して来たのである。「相」を「湘」と書き始めたのは、鎌倉時代にさかのぼり得るかも知れないが、はっきり指摘することが出来ない。今、私は、私の管見による一それも江戸時代の一、2のことを左に乗せてみたい。【省略】相模国の「相」を「湘」に、さらに「湘南」と美化したものは、大陸の名勝「瀟湘」や「湘南」による詩文などから、かの地に憧憬をもった学僧たち、ないしは、鎌倉時代から、あいついで来朝した渡来僧などに始まったのではあるまいか。【省略】禅僧鉄牛道機は、相模川を「湘川」といい、また「湘浦」といっている。このほか、相模の詩文によると、「湘東」「湘水」「湘岳」「湘峡」等の文字に出会う。「湘岳・湘峡」は相模国の霊山大山を言い、「湘水」は「湘水の浜」と書いて湘州の海浜を言い、「湘東」は鎌倉およびその附近を言っている。【省略】

興味深いのは「湘」という文字が中国の絶景の地をイメージさせる語(雅称)としてのパワーをもっていたとする説です。これが事実ならば、この指摘と1994(平成6)年に相模ナンバーを湘南ナンバーに置き換えてしまった湘南地域の出来事は「湘」と「湘南」がどちらも好ましい美しさの地域というイメージで通底していたこととなります。すなわち、「湘」という文字の力によって「湘南」が「相南」を駆逐したとすれば、「湘」の力の背景にあるのは、中国の景勝地「湘南」のイメージ力ですから、湘南の由来の2つの説は中国湖南省の「湘南」に帰結することになり、以上から湘南の由来説は1つに集約されそうです。要するに「相南」は存在しなかったか、存在したが「湘南」に早々に駆逐されて消滅してしまったとすれば、ひとつ目の説は存在する意味がない訳です。

## 2-4 湘南の由来説は誰が最初に発表したか？

前述した通り「相南」の可能性が現時点で見いだせない以上、相模国の南を指す「相南」が変化して「湘南」となったとする説の成立は難しそうです。かといって「相南」の使用例が見つかる可能性も否定できません。こうしてなかなか断定できない

のは、郷土史研究や歴史学において、湘南の由来に関する研究は研究に値するほどの魅力がなかったようにも思えます。そういう中であって、湘南の由来をきっちりと書いてくれた本があったのは有難いことです。そこで肝心の湘南説を最初に明確な説としてとりまとめて発表した人物は誰かということになりますが、今回の調査では前述した高瀬慎吾氏以前の事例が発見できなかったため、高瀬氏が最初に湘南の由来を記述した人物であると判断しました。2-2項で【省略】とした部分の文章部に湘南の由来説のエッセンスが詰まっています。キーワードとしての「湖南省」「洞庭湖」「碧巖録」「湘南・瓢北」「湘水(湘川)、瀟水」「長興山紹太寺」「湘江浪」「瑞雲山竜峯寺」「鉄牛道機」等を盛り込んだ湘南の由来説を読むと高瀬氏の文章やそれを引用した湯山氏の文章を下敷きにした由来説が多いことから、湘南の由来説のテンプレートとして多大な貢献をしたように思えます。以下にオリジナルな論を展開した高瀬氏の文章の一部を引用してみます。

発行年	著者・掲載書名・発行元
1968(S43)	高瀬慎吾「湘南の文学巡り」(湘南紀行文学会編)
1977(S52)	草柳大蔵「湘南の50年」ばら出版
1980(S55)	藤沢文庫刊行会「目で見ると藤沢の歴史」、名著出版
1987(S62)	湯山学「湘南物語Ⅰ」私家版
1987(S62)	みつはし貴義「湘南の逆襲」神奈川新聞社
1996(H08)	吉田克彦「湘南再発見」江ノ電沿線新聞社
1996(H08)	川嶋理夫「新・神奈川県の地理」伊倉退蔵監修
2000(H12)	島本千成「湘南別荘物語」
2005(H17)	小風秀雅「湘南の誕生」藤沢市教育委員会
2006(H18)	本田一壽「湘南雑記」新風舎
2009(H21)	小風秀雅「茅ヶ崎市史ブックレット11」

表1：湘南の由来について言及した記事の出典一覧

『中国の地図を開いてみると、揚子江の源流をなす地域に、相模湖の倍ほどもある洞庭湖がある。この洞庭湖を北にもつ平原を「湖南」と呼ぶのである。ここで、広西省の陽海山に発して北流する「湘水(湘川)」が、瀟水に合して悠々と洞庭湖に注ぐのである。その河水は清く澄んでいて、よく十尋の底を見ることができると言われ、沿岸の風景は変化に富み、絶景八処が撰まれ、古来これを瀟湘八景と言っている。また、登仙の妙境、衝山のあたりを「湘南」と呼んでいる。』

高瀬氏が記した上記の地域が湘南の由来である中国の「湘南」ですが、禅宗のメッカであったこの地がモンゴル人(元)によって占拠されたことから、祖国の地を追われた中国の禅僧たちの一部が、新天地を求めて日本に移動、そこから日本における

禅の世紀が始まり、その流れの中で禅宗文化が花開くときに「湘南」イメージが静かに浸透していった、というストーリーになる訳です。

## 2-5 高瀬慎吾氏とは？

今回の文献調査の最初のアプローチは、何はさておいても、相模国に関わる歴史学者として著名な湯山学氏の「湘南物語」を読むことから始めましたが、シリーズ第1巻の冒頭「地名のおこり」で湯山氏が紹介しているのが前述した平塚市の郷土史家・高瀬慎吾氏（1900～1991）でした。湯山氏が高瀬氏の文章を引用する際に記した文章を引用しておきます。



図2 高瀬慎吾夫妻 出典「平塚ゆかりの先人たち」

『人々は、「湘南」ということばにある種のことをイメージし、期待している。そしてこの「湘南」に住んでいることを、誇りにしている。このように「湘南」ということばから、ある種の地域の具体的な性格が、人々に定着するに至っているといってもよい。この地方が「湘南」と呼ばれることに、誰しもが疑問をいだかず、常識にすらなっている。この地方が「湘南」といわれる理由はなにか、いつから「湘南」といわれるようになったかを、問いただしてみることもすら人々はしなくなった。しかし、「湘南」ということばをあらたまって考えてみると、その性格の漠然としていること、その呼ばれている地域の不明確なことに驚かざるを得ない。こうしたことで「湘南論」を書きだしたら、優に1冊の本となるだろう。そこでこのシリーズのはじめはこの地方がいつから「湘南」といわれるようになったか、また「湘南」といわれる理由からはじめてみよう。幸いこのことについては、「郷土の文学散歩」シリーズのⅡとして、湘南紀行文学会同人が編んだ「湘南の文学めぐり」と題する冊子のなかで、郷土史家の高瀬慎吾氏が「湘南について」という題名でまとめておられるので、それを紹介しよう。』

湯山氏は以上の書き出しの後、高瀬氏が書いた「湘南について」と題した4頁の文章を分かりやすく要約し、湘南の由来を紹介しています。「湘南の文学巡り」は稀少な本のため（大磯図

書館が保管中)、「湘南物語」が由来執筆時の参考にされている可能性が強いものと思われます。

平塚市中央図書館の入り口近くに高瀬氏の顕彰碑があり、明治33年生まれの高瀬氏が郷土の文化財の散逸に心を痛め、私財を投じ熱心にその収集に努めたことや、後世に遺るものは碑石に刻すのがよいとの持論から建碑運動を展開し生涯に50余基の建碑に関わったこと、平塚市、厚木市の文化財保護委員等を歴任し、平塚市の文化財保護、郷土史研究等に功績があったことで、昭和54年に勲5等瑞宝章を受章したなどが刻まれています。平塚人物史研究会が編集・発行した「平塚ゆかりの先人たち」に彼の業績が詳細に記されていますが、小田原中学校時代に友人から借りた「新編相模國風土記」がきっかけとなり、平塚に関する記録の収集マニアとして70年近く蒐集を行った文化財や文献・資料が現在平塚市博物館に多量に保管されているそうです。こうした活動の中で「湘南について」の執筆があったものと考えられます。

最後に付け加えておきますが、2件ばかり明治以降に由来の理由を持ってくる事例がありました。1件は、藤沢文庫刊行会編の「目で見ると藤沢の歴史」で、『湘南とは、相模の南部を意味する「相南」だとか、日清戦争後に中国を旅した明治の文化人が、湖南省洞庭湖とこれに注ぐ湘河の美しさに魅せられ帰国すると、ここ相模南部の景勝の地に、湘南の名をつけたのだとかいわれている。』とする説明、もう1件は、草柳大蔵氏の「湘南の50年」で、『「湘南」を誕生させた「近世の漢学者」は誰であったか？これが分からない。富岡畦草の「湘南の散歩みち」の冒頭はこうなっている。「日清戦争後、中国に旅した明治の文化人は、湖南省洞庭湖とこれに注ぐ「湘河」の美に打たれて帰国すると、彼らの好んだ相模南部の風景に「湘南」の名を献じた。』でして、いずれも明治後の中国から帰国した人物の発言を取り上げていますが、流石に内容的に否定されるべき説明であると思います。

### 出典資料

- ・湘南の逆襲 みつはし貴義 神奈川新聞社 1987
- ・湘南物語Ⅰ 湯山学 私家版 1987
- ・湘南の文学巡り 湘南紀行文学会編 1968
- ・平塚ゆかりの先人たち 平塚人物研究会 2013
- ・湘南の50年 草柳大蔵 ばら出版 1977
- ・目で見ると藤沢の歴史 藤沢文庫刊行会 名著出版 1980